



『独学大全』
ダイヤモンド社 / 3080円 (税込)

独学者を阻む薄い壁

読書猿

(独学者)

「自分が苦手なことを克服するために
本を書いているような気がします」
みずから発想したことの間違いや嘘を捉えることこそが、
第一歩を踏み出すきっかけになると言う。
この世界における「独学」の意味をあらためて聞いた。

——二〇二〇年秋に刊行された『独学大全』は、二〇万部を超えるベストセラーになりました。これほど売れたことを、ご自身ではどう分析なさっていますか。

読書猿 想定外でびっくりしています(笑)。部数もさることながら、手にした人たちが本書で取り上げたテクニクをすぐに実践して、それをどんどんSNSに挙げています。ぼくの書く本は「道具箱なんで、使ってナンボですよ」といつも言うんですが、今回はそんな必要はありませんでした。

独学する人たちは、マスとしてまとまりのあるかたちでは見えなかったけれど、多分ずっといたんです。学校に行けなくても、周囲の人に笑われたとしても、それでも知りたいと思う心、学びたいという気持ちは止めようがない。いま、ある原稿のために日本の独学書を明治時代まで遡さかのぼって読んでいるのですが、「独学」がそこまで古い言葉ではないことがわかりました。日本がまだ新しい国だった頃、学校を急に増やすことができないなかで進学の機会は限られていた。それでも学ぶことに飛び込んでいった人たちが脈々といったんです。

『独学大全』はいま生きてる人だけでなく、過去のそうした名も無き独学者たちとつながって画を見続けられれば、考えが偏っていつてしまう。そうしている人たちは「自分が学んでいる」とか「学び方を工夫しよう」とか思うことはほとんどないと思うんです。

それに対して独学者は、「自分が学んでいる」という自覚があるが故に、学び損なっていることや、学び方に失敗していることにいくらか気づきやすい。ほんとうに薄いメリットですけれど、独学者は自分が「しくじった」「偏っている」という自覚があるために、危険から身を引くことができる可能性が、そうでない人に比べて、ほんの少しだけ高いと思うんです。

それでも人は間違えると思うし、本を出してもらえましたが、ぼくみたいな人間は危ないと思います。単純に面白いが、面白くないかという話になれば、面白い方に飛びついちやう。あと知識も足りないから、なにか学んでいて「えっ、こんなことも知らないであれを書いちゃったんだ」なんていうことは、しょっちゅうあります(笑)。

ただ、そういう自分の欠けている部分とか浅はかな部分を自覚している、正確には今まで痛い目にあっているからこそ、面白さを優先するあまり嘘を書いていないか気になったり、典拠を調べまくって注釈をつけることにこだわりま

いる。そういう地下鉦脈ともいえるものに、たまたまぼくの本が突き当たったということだと思います。さらに遡れば、例えばぼくらがソクラテスのことを知ることができているのは、翻訳や写本などいろいろな人たちの手を経てその知を受け継いでいるからです。学ぶことでその脈々とした流れを実感できるんです。

独善に陥らないための独学

——読書猿さんの使う「道具箱」という言葉が印象的です。コンピュータの世界でも「ツール」という言い方がありますが、そのあたりとの関連はありますか。

読書猿 ぼくにとってはとても自然な着想だったので、あらためて発想の根源を尋ねられると、はつきりしません(笑)。

ただ、ぼくはずっと本を読むのが苦手で、その代わりに辞書を読んできたんですけど、辞書類のことを中国語で工具書というんですけど、ああ、自分でもし本を書くことがあるなら工具書になるべきだろう、と。それはずっと思っていました。

『独学大全』はビジネス書やノウハウ本として紹介されることも多いのですが、そういった書です。物書きというのは怖い商売だと思ってるんですよ。「お前の独学本がトシデモ本じゃやないっていう保証はあるのか」って声なき声が聞こえる(笑)。それに対して「いや、保証はできないけど、こんなことを思っ、これだけのことをやってるよ」と言い返しながら、書いたり削ったり注釈することを続けているんです。

二分という薄い壁

——『独学大全』刊行から一年以上が経ち、各所からの反響を踏まえたくえで、あらためてお薦めしたいメソッドを教えてください。

読書猿 「ポモドーロ・テクニク」「2ミニッツ・スターター」でしょうか(P19図参照)。

独学というと、すごく大層なことだと思っておられる方が多いのかなと思います。例えば「2ミニッツ・スターター」は「二分だけやりなさい」と、着手することに大きな意味を持たせたメソッドです。「未着手」だったものを、「未完成」に生まれ変わらせる。速度ゼロから加速するのは大変なので誰しも腰が重くなるんですが、一度始めてしまうと続きをやりたくなくなる、もつと見なくなる、ということはありませんよ。

とにかく手を着けることにはそれ以外にも思

籍の多くは、著者が考えたベストな筋道を提供するというスタイルで書かれます。ぼくの本の場合、たくさんの道具を幕の内弁当みたいに詰め込んで、「この道具箱のなかから組み合わせて使ってください」というかたちになっている。Aさんには「1、2、3、4」がいいかもしれないけれど、Bさんには「4、5、6」がいい、ということがあり得ると思っただけです。こちらでルールを敷くのではなく、読者自身が組み合わせて使うほうが末長く使えるよね、と考えました。そのあたりは、UNIXというOSを生み出した人たちの哲学から多少なり影響を受けているかもしれません。

——「独学」には、独善に陥る危険性がつきものだと思いますが、それについてはどう考えますか。

読書猿 たしかに独学には独善的になったり、陰謀論に陥る危険もある。そうしたなかで独学者に有利な点があるとすれば、「自分が学んでいる」という自覚があることでしょうか。

暇つぶしで動画をずっと見ていると、いまでは閲覧履歴からおすめが抽出されて、同じような動画ばかりを見ることになりかねません。少々極端なたとえば、その昔ならカルト教団に監禁されて、洗脳のための映像を何十時間も無理矢理見せられたのに匹敵する集中度で動